定年退職したその暮れに　　T 男

2008 年の春に定年退職したその年の暮れ、体調不良を覚え翌年と翌々年に2つの病院で診察を受けました。しかし、いずれも検査の結果、何の異常も見当たらないということで年齢相応のものかなあと思い半ば諦めておりましたところ新聞で同様の障害を治療し改善されている医師を知り早速其の医師のもとへ参りました。

2010 年 4 月、京都市内の病院で診察を受けたのは泌尿器科でした。それまでは最初の病院では神経内科、次は神経内科と耳鼻咽喉科でしたので予想外の診療科となりました。血液、尿、MR、CT、超音波等 2 ケ月に渡り医師の言われるままのいろんな検査を受けました。最後に前立腺針生検（麻酔なし。もう二度と受けたくない大変つらい検査。）を受けるに至った時にはもしかしてという思いを持ちましたがまさかという思いの方が勝っていました。しかし、結果は PSA：4.64 ステージ 3/5 の初期の前立腺がんでした。初期であることや年齢等から手術を勧められ選択は患者が家族と相談のうえで患者側に預けられた形になりましたが私には何の予備知識も無く生来の従順さか主体性の無さか考えるのが面倒くさいのか何かで手術を受けました。

2010 年 7 月下旬ごろ、前立腺と精嚢の全摘出手術。約 1 カ月の入院生活の後自宅で療養し現在は 2 カ月に 1 回の経過観察を受けながらデスクワークが主な仕事に就いています。

今の悩みは、手術の後遺症と思われる切開部のしこり。常に下腹部に蒲鉾の板をあてがっているような違和感、特にしゃがむと下腹部が圧迫されます。主治医からは早期発見で幸運でしたねと言われましたがそれまで排尿に関して特に不自由も異常も覚えず、当初の手足のしびれ、食味不調が解消されない今、果たしてこれで良かったのかどうか、自分には他の選択肢があったのでははと今さら後戻りできないとわかりつつも自分をたしなめながら揺れています。

そして、不安は再発、転移です。術後の PSA 値は限りなくゼロに近く下がりましたが、1 年経過すると再び上昇し再治療に臨んでおられる人の例も聞いています。
入院していた夏は、熱中症で亡くなる人が各地で出る程の酷暑、猛暑日が続く日々でした。空調が効いて暑さ知らずの病院生活も明後日に退院を控えた日、古都の夜空を彩る風物詩を病室から眺めることが出来る幸運なひと時を持てました。

～病えて　五山送り火　間近に観～